

今年の7月に九州北部で甚大な豪雨災害が発生しました。鉄道においても、運転見合わせが相次ぎ、至る所で線路が流出しました。特に豊肥線においては、70km近い区間で不通となり、現在でも一部区間の復旧工事が続けられています。

今回の災害で、20年ほど前の豪雨を思い起こしました。このときも、豊肥線のほぼ同じ区間で災害が発生しました。当時、新入社員ではありましたが現地に赴き、崖の下で宙ぶらりんになった線路や流された橋脚を目の当たりにして大変衝撃を受けたことを鮮明に覚えています。この線路を復旧するには相当の時間がかかることを直感すると同時に、このような山間に鉄道を敷設することの苦労を実感しました。実際にこのときは、復

旧まで1年3ヶ月を要しました。

一方で、8月に入ると、関東や東北地方を中心に日照りが続きました。日照りは、鉄道にとっては、影響は少ないのですが、渇水や農作物へ影響が深刻になりました。

昨今の異常気象は、人間の産業活動が何らかの作用を及ぼしているともいわれています。しかし、地球の歴史から見れば、気候は常に変動し、時に急激に変化することがあるようです。このことから、気候変動は、産業活動とは無関係という説もあります。いずれにしても、大きな変動期であることは間違いのないようです。今後、気象災害への取り組みは重要性を増していくでしょう。(S.S)